Mansfield Park におけるハードボイルド的正義感
推理小説の母としての Jane Austen 作品

古川博宣

Jane Austen の *Mansfield Park* (1814) に対する評価は様々で、特に主人公 Fanny Price をどう捉えるかについて批評家は困惑しているようにさえ見える。Fanny の性格は、一言で言うと「手に負えないもの (impossible)」 であり、それを描く Austen は、それまでのコミカルなスタイルから離脱し、反骨精神に満ちている。ここでは、*Mansfield Park* の狙いが「社会の堕落に対する批判」であると捉え、Fanny が周囲の人々の思惑に翻弄されながらも、逆に、彼らの失敗によって状況を打開していく様子を検討する。その際、ハードボイルドという補助線を用いることにより、行動原理を重視する Fanny の信念が明らかになり、Austen 特有の洗練された、厳しい作品世界が見えることを示すことが目標である。

「ハードボイルド」とは、記録文書のようなリアリズムで暴力を描く、1920 年代以降のアメリカの犯罪小説に特有の文体である。通常の推理小説では、事件が起こってから探偵が呼ばれて謎を解明するのに対して、ハードボイルドでは、物語の冒頭で探偵が依頼を受けることで事件に巻き込まれ、事件の進行と探偵の活動とが並行して描かれる。探偵が感情に流されず、義務感とプロとしての行動規範に則って行動するのが特徴である。

１ *Mansfield Park* に関する先行研究

John Wiltshire は、ケンブリッジ版の Introduction の中で、 過去 200 年にわたる *Mansfield Park* の評価は、その主人公 Fanny と同様に散々なものだった (“[I]t has been neglected, passed over, misunderstood, sneered at and ill-used.”)と述べている (Wiltshire, Introduction lvii)。Joseph M. Duffy, Jr. は、*Mansfield Park* の真のテーマは「社会の堕落」であると論じている (Duffy 73)。本報告では、この Duffy の指摘を念頭に検討を進める。また、Marilyn Butler が Fanny の本質を弱さではなく強さであるとした上で、その性格を “impossible”と見ている (Butler 248) 点に注目し、この言葉を Fanny の行動様式のキーワードの一つと考える。さらに極端な例として、Nina Auerbach は、Fanny をモンスターになぞらえている (Auerbach 211)。一方、Wiltshire は、Fanny の身体性に着目し、Fanny が赤面する場面が 20 箇所以上あると指摘している (Wiltshire, *Jane Austen and the Body* 76) 。Fanny はモンスターなのか、血の通った女性なのか。このように多様な見解が示されるのは、Fanny を理解しようとして多くの批評家が戸惑っているためであると考えられる。ここでは、もう少し具体的に想像しやすい Fanny 像を提案したい。

２ Fanny の倫理観

この時代の他の小説にも、Austen の他の作品にも Fanny のような女性は見当たらない。Fanny は無口であるが、Austen の他の作品では、*Pride and Prejudice* (1813) の Elizabeth を筆頭に、詮索好きなヒロインが周囲の人々と会話を通じて意思疏通をはかる様子が生き生きと描かれる。Emma に至っては、周囲を振り回す策略家である。Fanny の性格に関して Robert B. Louden は、Fanny がカント倫理学に則った倫理的に有徳な人物であるかどうかを論じている。その結論は、Fanny の信念は、厳密にはカントの定義による「倫理」と同じではないということである (Louden 677) が、これは、Fanny の独特の性格を理解する上で示唆に富む議論である。

３ 空間的な人物配置と重層的なプロット

この作品の特徴は、空間的な人物配置と群像劇的かつ重層的な構成である。空間的な配置の例は、Bertram 一家が三つのグループに分かれて Rushworth 家の Sotherton 庭園を散策する場面である(Vol. 1, Ch. 9)。登場人物の一連の動きが舞台劇のように描かれ、劇中劇 *Lovers' Vows* の予兆となっているとともに、空間的な広がりの中で Fanny の孤立感と他の登場人物との心理的な距離が強調されている。Fanny を翻弄しようとした人々を予め整理しておくと、*Lovers' Vows* への出演を依頼した Tom (171)、それを Fanny が断ったとき叱責した Mrs. Norris (172)、Fanny に結婚を迫った Henry (348–49)とそれを強要した Sir Thomas (366–67) の 4 人である。

Lovers' Vows の配役が決まるまでのやり取りは、群像劇的に描かれ (Vol. I, Chapters 13–18)、登場人物の性格と人間関係が明らかになる。Henry と Maria が演じる役は、劇中で抱き合う場面が多いことから二人のその後の不倫の前兆と見ることができ (155–57)、Julia が Mr. Yates とふざけ合うのは、後の二人の駆け落ちの伏線であろう (190)。台本を読んで劇の内容が不謹慎だと判断した Fanny は、Tom から誘われ、Mrs. Norris から叱責されても、かたくなに出演を拒む (171–72)。一方、Edmund は妥協して出演することに同意する。キャスティングを通じて、その後の恋愛の成り行きが予告されており、これらの一連の場面は、Fanny が置かれた「敵に囲まれた場」を明確にすると同時に、その後の小説の流れを予見させるという意味で重層的な役割を担っている。

４－１ 空気の読めない Fanny

Fanny の姿勢は、植民地アンティグアから帰国した Sir Thomas から奴隷貿易について話を聞こうとする場面で際立っている。Fanny が一家の経済基盤である植民地に関心を寄せているのに比べて、家族は無頓着なのである。

奴隷制という当時の重大な社会問題 (Southam 13) を正義感にも経済観念にも乏しい家族の「沈黙」として表現したところに Austen の非情と言ってもよい反骨精神が発揮されている。Austen は、Fanny が聞く人によってはタブーとも感じられることを話題にできる人物、今の言葉で言えば「空気の読めない人」であることを示したと考えられる。

４－２「ノー」といえる Fanny

自分の信念に根ざした Fanny の一貫して強い姿勢は、Henry からの求婚を断る場面でも発揮される。Henry は、海軍にいる Fanny の兄、William の昇進を助け、それを交換条件のようにチラつかせて結婚を申し込む。Sir Thomas からも Henry と結婚するよう強く勧められるが、Fanny は、Henry に行動原理 (principles) がないことを見抜いて断固として断る (366)。Fanny の行動様式は、タブーとも思える質問をして周囲を困惑させる上に、このように、自分の信念に反する事柄に対しては断固、抵抗し、さらに他人に対しても “principles” を求める、すなわち、一言でいうと “impossible” なものである。

５ Edmund の豹変

Edmund は Mary に惹かれていたが、次第にその性格に疑問を感じるようになり、ついに、倫理観の欠如した Mary の本性をはっきり知るに至って、彼女に対して毅然とした態度をとる (350–51)。この場面は、礼節を重んじる当時にあっては相当に冷たさを感じさせるが、Austen の冷徹さは、さらに続く。この時、Edmund の兄 Tom が重病であったため、Mary は、Tom に万一のことがあれば、Edmund が Bertram 家の当主になるかもしれないという打算をしていたのかもしれないというのである (531)。

６ まとめ：ハードボイルドの予兆

Fanny に影響を与えた 4 人の結末を整理すると、Tom は重病にかかり(494)、Henry は Maria と不倫の関係になり (509)、それを知った Mrs. Norris は人が変わったように落ち込み (518)、Sir Thomas は娘たちへの教育がなっていなかったと嘆くことになる(535)。すなわち、Fanny の身の上は、周囲の人々に翻弄されながらも、彼らの方が自滅していって、最終的に Fanny が最もふさわしい男性と結婚する、というものである。Fanny の幸せを喜ぶ一方、他の登場人物たちを突き放しているかのような Austen の最終章の書き方からは反骨精神が感じられる (533)。

奴隷制度に対して一人では無力な Fanny が Sir Thomas に質問を投げかけた態度には、実は、後のハードボイルド探偵の行動様式を連想させるところがある。探偵は、巨悪に直面したときに社会秩序を回復させるように働くわけではなく、「周囲をただかきまわす (“just stirring things up”)」のである (Hammett 75)。また、探偵は、到底、倫理観など期待できない相手に対して、「ノー」と言うだけでなく、とぼけた様子で “It’s not the money . . . it’s the principle of the thing.”と “principle” を振りかざしてみせることさえある(Hammett 33)。ハードボイルド探偵は、冷血漢かもしれないが、職業倫理に忠実で、話の通じない相手に対しては、わざと空気の読めないフリをする、手に負えない存在なのである (Chandler 121)。

20 世紀初頭に発祥した文学ジャンルであるハードボイルドを補助線とすることは、（もちろん、*Mansfield Park* には犯罪も暴力も皆無であるが）多くの批評家を戸惑わせてきた Fanny の性格を捉え直す上で有効であった。Austen は、ハードボイルド的なメンタリティを持つ Fanny を Bertram 家という倫理観に乏しい「場」の中に配置し、彼女が「ノー」と言いながら周囲をかきまわす様子を描いたのである。本作品のプロットや Fanny の行動様式の背後には社会の堕落を見る Austen の厳しい眼と反骨精神があり、それこそが後のハードボイルドを生む予兆となったのではないかと思われる。

参考文献

Auerbach, Nina. “Jane Austen’s Dangerous Charm, Feeling as One Ought about Fanny Price.” *Jane Austen: New Perspectives, Women & Literature (New Series)*, vol. 3. Edited by Janet Todd. Holmes & Meier, 1983, pp. 208–23.

Austen, Jane. *Mansfield Park*. Edited by John Wiltshire. Cambridge UP, 2013.

Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*. Oxford UP, 2002.

Chandler, Raymond. *Playback*. Penguin, 1978.

Duffy, Jr. Joseph M. “Moral Integrity and Moral Anarchy in Mansfield Park,” *ELH*, vol. 23, no.1, 1956, pp. 71–91.

Hammett, Dashiell. *Red Harvest*. Edited by Steven Marcus. The Library of America, 1999.

Louden, Robert B. “Firm as a Rock in Her Own Principles (But Not Necessarily a Kantian).” *Social Theory and Practice*, vol. 33, no. 4, 2007, pp. 667–78.

Southam, Brian. “The Silence of the Bertrams.” *TLS*, Feb. 17 1995, pp. 13–14.

Wiltshire, John. *Jane Austen and the Body*. Cambridge UP, 1994.

——. Introduction. *Mansfield Park*. Cambridge UP, 2013, pp. xxv–lxxxiv.